

学生参加型授業の実践—授業という異文化コミュニケーション— Student-participant-class as intercultural communication

山 脇 千賀子*

Chikako YAMAWAKI

1. 私の学生参加型授業の背景

本稿では、1999年度より国際学部において「国際コミュニケーション論」・「異文化コミュニケーション論」・「地域研究（中南米）」といった授業を担当している教員として、私が実践している学生参加型授業について紹介したい。

上記の授業科目は、伝統的な近代的学問体系からすれば学際・複合分野にカテゴリー化される。また、私自身のアカデミック・バックグラウンドは、文化人類学および社会学分野であり、言語学や法学などのような他の「伝統的」文科系学問分野などと比較した場合、学際的研究との垣根がもともと低い学問分野といえよう。私の授業は、こうした学際的性格が交錯するところに位置づけられる。

私が考える国際学部の学生が学ぼうとしていることとは、たえず新しい社会的情勢に対応しながら、われわれはどのように社会や人間を理解することができるのか、である。そして、よりよい世界をつくっていくための様々な力（構想力・企画力・運営力・交渉力・評価力など）の基盤づくりをしようとしている。そのために、私の担当授業で目指していることは、基本的な関連知識を学生が吸収することだけではなく、学生自身が世界とどのように関わろうとするのかを考える力をつけることである。ここでいう「考える力」には、考えよう・学ぼうとする動機や意欲も含まれている。私が参加型授業を実践している意図の一つは、学生自身が授業の主役になることで、問題の当事者意識を高める効果があることを実感しているからだ。

上述の条件が混ざり合った結果として、私は授業をつうじて学生に以下のようなことを期待している。自らが属する文化・社会をまるで「他者」のように距離をとって観察する視点を持ち、あらゆる文化・社会をたえず生成・変転し続けるものとして観察する姿勢をもつこと。そして、観察しつつも当事者として参加すること。

参加型授業が「伝統的」学問伝授の形式として異例なのは、学生が純粋な観察者になることをめざすのではなく、観察者であることと同時に観察対象のなかに自分自身を置くことを学生に求めている点にあるだろう。このため、私の授業は学生にしばしばアイデンティティ・クライシスを引き起こすような自己否定や自己改革を強いる側面もあり、学生によっては拒否反応を引き起こす可能性もある。また、すべての学問分野や教員に適合性がある授業スタイルということもできない、と私は考えている。こうした授業スタイルでは教員にも上述した学生に求められることが、すべて要求される。

このようにして構成される授業は教員と学生との共同「作品」である。別の言い方をすれば、学生と私の相互作用によって授業は作られる。私は教員として、学生に身に付けて欲しい知識や考えて欲しいテーマに関連する「素材」を提供すると同時に、考えるためのある種の「テクニック」を伝

*文教大学国際学部准教授

授する役割を果たしている。しかし、その他の面からいえば、私も学生とともに考えるひとりの人間だ。私が提供した「素材」について、学生ひとりひとりがどんな考え方をもっているのかを知りたいという気持ちを私自身が持続できなければ、このスタイルの授業は成り立たない。また、もう一方の「主役」である学生の反応がなければこうした授業は成り立たない。そして、学生の反応を受け取るためには、私の提供する「素材」が学生の知的関心を引き起こすようなものでなければならない。

このように、授業を学生との相互作用の場として成り立たせるための具体的な工夫については後述するが、授業という場は、私にとってあくまでも学生との「異文化コミュニケーション」の場と捉えていることを強調したい。学生がどのような反応をしてくれるのかによって私の授業は大きく左右される。それは、伝統的な学問体系をもった分野の授業においては、「あってはいけないこと」かもしれない。確固とした学問体系の基礎を積み上げて、その分野の専門家を養成するためには、教える側には確固とした「教えるべきこと」があり、それが簡単に変化するようなものであっては意味がないことになるだろう。

誤解されないためにいうなら、私の授業にも確固とした伝えるべきことがある。しかし、伝えたいことを学生の「身」にしてもらうためには、まず学生がどんなことに興味をもっている人間かを知り、彼らも持っている可能性を伸ばす方向性をみきわめることが大事ではないだろうか。相手によってわれわれがとるべきコミュニケーション・スタイルが変化するのは当然であろう。

学生が私の授業に対してどのような反応を示しているのかを知るために、私が一人で担当している授業に関しては、各授業の最後に学生にコメントペーパー（B6版）の提出を義務付けている。コメントペーパーは私と学生の貴重なコミュニケーション手段になっている。私はコメントペーパーをつうじて、学生がどの程度授業を理解したのかを確認し、私が学生に投げかけたテーマについてどのように感じたり・考えたりしたのかを知ることができる。また、コメントペーパーは成績評価の対象にもなっている。出席したのにもかかわらず、私の投げかけに対して真摯に向き合っていないと判断できるようなコメントに対しては厳しい評価をすることにしていく。

コメント・カードには、毎回授業直後すべてに眼をとおして、次回の授業の参考資料としている。学生に誤解を生じさせるような事項があることが分かった場合や授業を発展させるために有益なコメントがあった場合など、すぐ次の授業で対応することができるからだ。学生は仲間のコメントが授業に取り入れられていることを知ると、自分達も授業に参加しているという意識が高まるようだ。

このような私の授業スタイルは、文教大学国際学部の学生たちとの異文化コミュニケーションを重ねて変化し続けているといってもよいかもしれない。それは、音楽家のコンサートのできが聴衆によって左右されることがあるのと似ている。こうした意味で、私の授業は学生とつくる「作品」なのだ。

以上の前提に基づいて、私がこれまで行ってきた学生参加型授業の試みを具体的に紹介していきたい。

2. 実践例①異文化コミュニケーション論A：異文化シミュレーション型エクササイズ

2000年度からの国際学部カリキュラム改編によって私が担当することになったのが、異文化コミュニケーション論A・B（各2単位）である。これらの授業は、新設された国際コミュニケーション学科において多文化コミュニケーション・コース原則必修となった2年次における短期留学（1セメスターを米国・豪州の大学での研修で単位取得する）の前後セメスターに配当された。Aの授業では短期留学前の心構えを整えるための異文化コミュニケーション論を目指したのに対し、Bの授業では短

期留学後に自分たちが外国で経験したことを相対化・総体化する視点を獲得することを目標とした。

Aの授業に関しては、各セメスターにおける受講生数は約70～110名程度の範囲であったため、私がモットーとしている教員と学生の相互作用の場としての授業を成立させることは大変難しい条件にあった。そこで、私が学生ひとりひとりとのコミュニケーションを授業の場で行うのではなく、学生同士での相互作用をする機会を作ることによる参加型授業づくりの工夫が必要になった。そこで、私が採用したのは異文化コミュニケーションのシミュレーションに相当するエクササイズを授業に組み込むことだった。ここでは、二つの授業例を紹介しよう。

一つ目は音楽を活用した授業である。まず、世界各地の異なる音楽のCDを6つくらい用意する。例えば、キューバの黒人系住民が祭りで奏でる音楽、メキシコ高地の先住民によるカトリック教会の祝日の歌、アルジェリアの人気歌謡歌手の歌、台湾の先住民族による収穫を祝う歌、インドネシア・バリ島のガムラン（打楽器演奏）など、日本の大学生にあまりなじみのない音楽を中心にする。それぞれの音楽を一曲聴いてもらい、一曲ごとに次の質問事項に答えるという作業を行う。

① この音楽を聴いてイメージしたことを自由に記述してください。

② この音楽が好きですか。5段階評価で答えてください。

③ この音楽をどの程度の頻度で聴きたいですか。5段階評価で、毎日聴きたい～できるなら聴きたくない、までの選択肢から選んでください。

一連の作業が終わった後、それぞれの結果を学生たちに挙手してもらうことによってクラス全体の傾向を把握する。また、学生が各音楽についてどのように感じたか、何人かの学生が記述した回答を読み上げてもらう。40名程度のクラスサイズであれば学生をグループ分けしてディスカッションを行うところだが、70名以上となると一回の授業内でディスカッションを取りまとめることが難しい。学生の発表は、なるべく多様性のあるものを選ぶようにする。そのためには、学生が質問事項への回答を記述している間に、教室を巡回しながら学生たちの回答に目を走らせなければならない。

この授業では、普段あまり聴き慣れていない音楽に対する違和感を自覚し、異文化に接したときに感じることの「疑似体験」状況を作っている。学生たちは、自分にとって心地よいとは限らない音楽が、いやでも毎日耳に入ってくる状態を想像させられる。そして、この違和感に包まれながら生活することが異文化コミュニケーションなのだということを、身をもって実感する。また、自分が感じた違和感をクラスの仲間すべてが共有しているわけではない、という「異文化」への接触経験をするにもなる。

授業のまとめ方は、その時々々の学生の記述や反応によって多様なものとなる。質問事項①で記述してもらったある種の音楽によって喚起されるイメージと日常生活のなかで培っている民族性などに関するステレオタイプの対応を分析することもできる。また、それぞれの音楽のバックグラウンドについて私が解説を加えることにより、音楽に表現されている文化を探求する方法を伝える授業展開にすることもできる。

肝心なのは、学生自身が異文化コミュニケーションの理論を「頭」で理解するだけでなく、身体を使って実感することなのである。このように、学生の身体と頭を同時に働かせるような仕掛けを授業に組み込むことにより、異文化コミュニケーションへの理解を身体に刻み込んでほしいのだ。

二つ目の例は、個々の学生同士が実際に「ふれあう」異文化コミュニケーションのシミュレーションを行う授業である。この授業は、本授業のテキストとして使用している八代京子ほか編『異文化コミュニケーション・ワークブック』（三修社）で紹介されているエクササイズを参考に独自のアレンジを加えて行っているものである。まず、7～8種類ほどのコミュニケーションに際してのルールを

書いたカードを準備して、学生ひとりにつきカードを一枚引いてもらう。ルールとしては、実際に文化的に望ましいと考える人がいるようなものを提示する。例えば、以下のようなものである。

- ① 初対面の相手に失礼にならないように、最低1メートル以上は相手との距離をとり、決して面とむかって目を合わせないようにすること。
- ② 相手に親しみを表現するために、不自然にならない程度に適切な身体の部位（例：腕や肩など）にタッチングをすること。
- ③ 相手の言っていることを真剣にきいているということを分かってもらうために、まずは相手の主張を繰り返してそれが間違っていないかどうかを確認して会話をすること。

以上のようなルールに則って、クラスの最低5名以上の受講生（しかも、普段話したことがないような学年や学科のちがうクラスメート）と3分間ほどの会話をしてもらおう。会話のテーマとしては、「夏休みにやったこと」、「年末年始の予定」など、学生が誰とでも話しやすいと思うテーマを選ぶ。そして、一人との会話を終えるたびに、相手はどのようなルールに則っていたのかを推測して用紙に記入してもらう。また、それぞれのルールに則った人との会話で、相手のコミュニケーション・スタイルに対してどのような印象をもったのかを分析・記入してもらう。

会話をしているときの学生の様子は多種多様だ。人見知りをするタイプの学生にとっては、知らない学生に話しかけるということは苦行以外のなものでもないが、会話が好きでたまらない学生は嬉々として色んな学生に話しかけてまわっている。そして全体的には、相手のコミュニケーションのルールを見破るというゲーム性も手伝い、教室全体が浮き立つような興奮感に包まれるのが一般的な反応である。

授業では最後に、学生の記述を何人かに発表してもらって、各自が感じたこと・考えたことの共通性と相違性をクラス全体で共有することをめざす。さらに、異文化コミュニケーションの現場で起こることとはどのようなことなのか、それまでに学習している理論的な側面とつぎ合わせた分析を私が行って授業をまとめる。理論的には非言語コミュニケーションが実際のコミュニケーションにおいてどのような役割を果たしているのかに関する先行研究などを紹介することが多い。

「伝統的」授業では、異文化コミュニケーションに関する先行研究によって分かっている様々な概念について説明するだけの授業になり、学生の「頭」に訴えかけるだけになってしまう。それに対して、私の授業でめざしているのは、学生自身が「身体」をもって学ぶことを補助することである。ここでいう「身体」は、学生ひとりひとりの身体をさすだけではなく、クラスに参加する皆の身体を含み込んだ「場」でもある。学習の意欲を高めるような「場」をつくることは、クラスを運営する教員の重要な役割のひとつだと私は考えている。

3. 実践例②異文化コミュニケーション論B：身体を使うエクササイズ

異文化コミュニケーション論Bは、例年Aに比較すると受講生数が少ない。40名くらいまでのクラスサイズであれば、私が学生と直接コミュニケーションをとりながら授業進行することが可能になる。さらに、身体を使うエクササイズを行うのに、私の眼がクラス全体にゆきわたるクラスサイズでもある。

身体を使う異文化コミュニケーションのシミュレーション・エクササイズの代表例としては、「目隠しウォーキング」を挙げることができる。これは、福祉系授業の視覚障害者に対する介助エクササイズとして行われる場合が多いが、異文化コミュニケーション論とのかかわりに注目して授業に取り入れている例はあまり多くないのではないかと推測する。

活動の中身を紹介しよう。まず学生に二人一組のペアになってもらい、一人に目隠しをしてもらい残りの一人が介助をしてキャンパスを歩いてもらう。一度、教室に戻ってきたら、次は役割を交代して同じコースを歩いてもらう。それぞれの経験をやるに際して、学生に指示することは、眼が見えない状態になったときの心の動きや感覚の働き方を意識することと、介助者になった場合の有効な援助のしかたはどのようなものなのかを考えながらウォーキングするように、ということだ。

ウォーキングを始めるのに目隠しをした時点で、既に多くの学生が「こわい」と騒ぎ出す。頭の中でイメージできる日頃歩き回っているキャンパスの中でさえも、眼が見えない状態で歩くことには大きな恐怖感がともなうのだ。そこで、恐怖感を和らげるためには、介助者との信頼関係がいかに大事かを学生たちは実感する。介助者は多くの場合、言語による情報提供を行うことに精一杯になりがちだが、それさえ、日頃目に見えることを言葉にする訓練をしていないと十分にはできない。どのような指示が相手にとって理解しやすいものなのか、どんなタイミングで指示することが適切なのか、という問題は眼が見えない状態でのウォーキングには重要なポイントだ。ウォーキングの間は身体と頭脳をフル回転させながらペアで協力しあわなければならない。このペア・ワークがまさに異文化コミュニケーションの実習なのである。

このように何らかの感覚を遮断された状態は、母語での情報提供がない慣れない環境で行動をする際の状況と類似しているということもできるだろう。慣れた文化を慣れていない人に対して、どのように言語化して伝えることができるのか。その際に、注意すべきことにはどのようなことが含まれるのか。慣れない文化に戸惑う人に対する良い援助者とはどのようなサポートができる人のことか。異文化コミュニケーションに応用できる問題群が次々に出現するエクササイズだ。

また、目隠しをすることは、日頃歩いているときには意識していない感覚の働きに気づく仕掛けにもなる。太陽の降り注ぎ方や風のそよぎ方が歩くことと関係しているとは、普段の生活では思いもしない。足の裏で踏んでいる感覚（例えば、階段の縁についているギザギザ状の滑り止めの感触など）が歩くことを支えてくれるということに、視覚を遮断することによって初めて気づいたという学生もいた。

このような「無意識の意識化」は、まさに私が異文化コミュニケーションの核になるプロセスとして学生に理解してもらいたいと思っているテーマだ。

次に紹介するエクササイズも「無意識の世界」を顕現させることを意図している。コミュニケーション学者の斉藤孝が日本人の身体文化への気づきを意図して実践している「厚紙での割り箸割り」エクササイズである。空手家が素手で瓦割りをするパフォーマンスがあるが、これを一般の人にもできるエクササイズにしたものと考えると分かりやすいだろう。というような説明を学生にすると、「そんなこと素人の私たちができるわけない」という雰囲気が教室に漂う。「できたとしても、ひとりかふたりでしょう？」というのが、学生たちの初めの反応だ。しかし、実際には七割以上の学生が名刺大の厚紙で割り箸を見事に割ることができる。

このエクササイズで大事なものは、武道などでしか触れられることのなくなった「丹田」を身体を中心として意識することだ。私は、高校・大学時代に弓道部に所属していた経験がある。この経験を活かして、エクササイズの初めに、学生たちに弓をひく「型」を徒手でやってみることを指導する。弓をひく行為を宇宙とのコミュニケーションとしてイメージすることができるよう、丹田を意識した呼吸法の練習から始める。身体だけでなく頭脳にも働きかけるためにヘリゲル著『弓と禅』のエッセンスを紹介しながら、身体と宇宙の相似形をイメージしてもらう。

こうした心身の準備が整った後に、学生二名一組になってもらい、割り箸をもつ役割と厚紙で割る

役割を交互に行う。多くの場合、最初に割ることができるのは女子学生だ。腕を使って力任せに割ろうという気持ちがあると、なかなか割ることができない。無心になって、丹田を意識する呼吸法で息を吐きながら、全身で厚紙を振り下ろすというよりは、地球が重力で引っ張る力に身体を任せるようにすることが「コツ」であることを指導する。とはいえ、どこかで「割ろう」という意識が働いていると「つい」腕に力が入って、結局割ることはできない。このエクササイズの間は、クラス全体が不思議な熱気に包まれる。

実際に割ることができたペアには、割れた時と割れない時の違いが何だったと思うか、そして割れた時の感覚はどのようなものだったのかをコメントペーパーに記入してもらおう。割れなかった学生にも、周囲のクラスメートが割った状況を観察してもらって、その様子をコメントしてもらおう。

このエクササイズも、身体文化論をはじめとしたさまざまな異文化コミュニケーションのテーマと結びつく。しかし、学生がもっとも印象づけられるのは、「紙で割り箸を割ることができるわけがない」という自らの思い込みを目の前できれいに覆される経験のようだ。そのことによって、自分がそれまで当たり前だと思っていた世界が違う視点から異なる姿で見えてくるようになる経験は、異文化コミュニケーションの醍醐味のひとつだろう。

このほかの授業をひとつだけ紹介して、異文化コミュニケーション論の実践紹介を終わりにしよう。社会や文化が誕生する源としての模倣というテーマで、私の専門分野であるラテンアメリカ社会に特有のラテン・ダンスの初歩的なレッスンを行う授業もある（野村 1996：142-3）。これは、次節で紹介する授業「地域研究（中南米）」でも学生の要望に応じて行うことのある授業だ。ダンスは社交の基本であるが、そもそも社交こそが私たちが「社会」という訳語をあてているsocietyの根幹的意味を形成するものだ（山崎 2006）。ダンスというコミュニケーション・スタイルのなかに「社会・文化」の起源を探ることは、知的にも身体的にもスリリングな感覚を私たちにもたらす。「地域研究（中南米）」受講生にとっては、教室でのラテン世界の疑似体験となる。

4. 実践例③地域研究（中南米）：ドラマによる歴史理解

中南米は日本からみて地球の反対側に位置することもあり、日本人にとってはあまりなじみのない心理的にも「遠いところ」というイメージがある。その「遠いところ」に関する問題群に取り組む授業だからこそ、学生がそれらに対して自分の問題としての当事者意識をもって考えることができるようにする工夫が必要だ。

その工夫の一つが「ドラマを活用した歴史理解」をめざす授業展開である。現在までにこの手法で授業を行ったことのあるテーマは、「大航海時代のキリスト教布教をめぐる歴史」、「奴隷制下における人間関係をめぐる歴史」、「アメリカ大陸におけるアンチ・アジア人移民キャンペーンをめぐる歴史」である。これらのテーマに関連する社会的な集団を3つ設定して、学生を希望によりグループ分けして、それぞれの役どころの言動を5～6名で推測してもらおうグループワークを行う。その後、各グループからの代表を選出してもらい、ドラマ仕立てで歴史的に起こったことを追体験してもらおう構成だ。

一例として、「奴隷制」の授業を紹介しよう。ドラマの舞台は、19世紀初頭のペルー海岸部にある平均的規模の奴隷を所有している大農園とする。実際に、私自身がペルーの元大農園がミュージアムとなっている観光地を訪れたときの写真を学生には見せておく。学生たちのイメージを高めるためだ。さらに、テキストとしている遅野井茂雄ほか編『ラテンアメリカ世界を生きる』（新評論）で、私自身が執筆した当時の奴隷制下の身分社会のあり方を解説した章をグループワークの前に読んでおくこ

とを課題とする。

ドラマの始まりは、次のようなものだ。ある日、大農園内にある所有者が住む大邸宅でご主人様の奥様が大切にしていた宝石がなくなる。そこで、ご主人様家族の日常的な身の回りの世話を行う家内奴隷が宝石を盗んだのではないかと疑われるが、家内奴隷は身に覚えのないこととして否定する。そこで、ご主人様は家内奴隷に犯人を捜すことを命ずる。家内奴隷は、きっと農園の奴隷のなかに犯人がいるに違いないので、必ず犯人を捕まえてみせるとご主人様に約束をする。そして、この後に起こることを推測してもらうのが、グループワークである。

グループは、①ご主人様・奥様、②家内奴隷、③農園奴隷の3つに分かれてもらう。それぞれが、自らの利益を最大限にするためには、どのような手段を用いて、どのような行動を起こすと思うのかを考えてもらうのだ。それぞれのグループがもっている「資源」をどのように活用することができるのか、テキストにはたくさんのヒントが埋め込まれている。したがって、それぞれが自分たち以外のグループが考えそうな言動の裏をかくつもりで自分たちのとるべき言動を考えなければならない。

このグループワークが行われている間、私は教室のなかを巡回して、ディスカッションが方向性を見失っているグループには適度な「介入」を行ったり、感覚を言語化できずにいる学生の手助けをしたりする。その後、各グループから代表を選出してもらい、教壇の上でそれぞれの役を演じる即興劇を行う。劇中、適宜私が介入しながらストーリーを完結の方向へ導く。こうした活動をとおして、私に「公式文書」として提出されるコメントペーパーに記される学生の考え方とは一味違う「生の」学生の姿が垣間見られることが少なくない。

授業に臨んで私はあらかじめ学生の反応をある程度は予想をし、クラスの進行に関する見通しをもっているが、時に学生は予想をよくもわるくも裏切ってしまう場合がある。こうした異文化コミュニケーションを楽しみにできることが、私が授業に臨む原動力になっているといっても過言ではない。

以上、具体的な私の学生参加型授業の展開例を紹介した。とはいえ、授業はパフォーマンス・アートのようにそのつど消えてしまう「作品」であって、ここで記述したのはラフなシナリオに過ぎないことを強調しておきたい。そして、私が準備したシナリオを一方向的に押し付けるような授業を行うと、学生たちは容赦なく不満を表明する。学生参加型授業の実践において最も肝要なのは、即興的に学生の反応を尊重した授業展開にすることだ。授業をともに作る対等なパートナーとして学生を位置づけることが求められる。そうでありながら、私の授業での役割は、監督・脚本家・演出家・役者のすべてを同時にこなすことなのだから、こうしたことを楽しめなければ続けられない授業形態なのだと、日々実感している。異文化コミュニケーションは、正に楽しくも苦しくもあるという実績の積み重ねである。

参考文献

- 遅野井茂雄・志柿浩光・田島久歳・田中高編 2001『ラテンアメリカ世界を生きる』新評論。
 斉藤孝 2000『身体感覚を取り戻す』日本放送出版協会。
 野村雅一 1996『身ぶりとしぐさの人類学』中央公論社。
 オイゲン・ヘリゲル1981『弓と禪』福村出版。
 八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美2001『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社。
 山崎正和2006『社交する人間』中央公論新社。